

## エズラ記5章1-5節 「神の目の注ぎ」

### 1A 神殿建設の再開

#### 1B 阻止による中断

#### 2B ペルシヤ王からの書状

### 2A 二人の預言者

#### 1B 「宮を建てよ」

#### 2B 「わたしの霊によって」

## 本文

私たちは聖書通読の学びをして、エズラ記は4章以降に入ります。午後は4章から6章までを学んでみたいと思います。今朝は5章1-5節に注目します。

1 さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。2 そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子ヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。3 そのとき、川向こうの総督タテナイと、シエタル・ボズナイと、その同僚とがやって来て、こう言った。「だれがあなたがたに命令を下して、この宮を建て、この城壁を修復させようとしたのか。」4 そしてまた、「この建物を建てている者たちの名は何というのか。」と尋ねた。5 しかし、ユダヤ人の長老たちの上には神の目が注がれていたもので、このことがダリヨスに報告され、ついで、このことについての書状が来るまで、この者たちは彼らの働きをやめさせることができなかった。

### 1A 神殿建設の再開

#### 1B 阻止による中断

私たちはエズラ記3章で、帰還したユダヤ人が神殿の礎を据えて主を賛美したところまでを読みました。そして、これから神殿を建てるといふ時に、激しい反対運動、建設阻止運動に遭いました。その周辺に住んでいる者たち、サマリア人がそれを行ったのです。その地域の役人たちを買収して彼らに反対させました。そしてついに、彼らの神の宮の工事は中止させられました。それが、ペルシヤ王でダリヨスという人が治めた第二年、紀元前520年までそうであった、と書いてあります。工事は、15年ぐらい中断していました。

#### 2B ペルシヤ王からの書状

その長い期間を経て、ダリヨス王の治世第二年、二人の預言者がコンビで彼らに対して預言したのです。その預言に励まされて、ユダヤ人の総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアは立ち上がりました。そして、神殿の工事を再開させたのです。以前と同じように、その建設をやめさせようとした役

人が来ました。けれども、今度は違いました。彼らは、工事をやめることなく彼らに毅然と臨むことができました。神の目が注がれている、と書かれています。すばらしいですね、二人の預言者による励ましと慰めで強められた彼らは、神の目が注がれていたので工事を続行することができました。

そしてその役人は、書状をペルシヤ王ダリヨスに送りました。彼らが、イスラエルの神の名のためにこの建物を造っている、そしてこれはクロス王が布告したものだと話しました。それで本当にクロス王から命令が下されているか調べてください、という内容です。すると保管所から、出てきました。そこでダリヨスは、神殿建設のためにペルシヤの予算を使いなさい、いけにえを怠りなく与えよ、また建設を阻止しようとするものは磔にされて、その家はごみの山にするという厳しい罰も課しました。そしてついに、ダリヨス王の治世第六年、すなわち約四年後に神殿が完成したのです。

## **2A 二人の預言者**

ここまで彼らに力を与えたその預言の言葉が何なのか、とても気になりますね。私たちはその一部を前回学びました。ハガイ書2章の言葉です。そこで私たちは、私たちの内で良い働きを始めた神は、キリスト・イエスの日までにそれを完成させてくださるという約束を学びました。

神は個々人の中で、そして教会において良い働きを始めておられます。私たちは、その働きの渦中で落胆してしまうことがしばしばあります。その原因の一つは、比較でした。これまでのものと今のものを比べる、自分と他の人を比べる、そして神の与えられた大きな幻と今現在していることを比べる、そこで今していることが無きに等しいではないかと思っ、て、がっかりするのです。しかし、神の栄光によって強められなさい、そして仕事に取りかかれ、と神は命じられました。そして、主が共におられ、完成するものは、先の栄光よりまさるものなのだ、と励ましました。ですから、主は私たちのうちで始められた良い業を完成して下さいます。

## **1B 「宮を建てよ」**

けれどもハガイは初めに、工事を中断していた彼らに対して、戒めと警告の言葉を与えていました。私たちは落胆して、主が始められた働きから退く時があります。その退きに対して神からの叱責があります。それがハガイ書1章の内容です。2節から8節までを読んでみたいと思います。

2 「万軍の主はこう仰せられる。この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。」

3 ついで預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。4 「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。5 今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。6 あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。7 万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。8 山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそ

れを喜び、わたしの栄光を現わそう。主は仰せられる。

私たちが信仰に歩みをする時に、悪魔が使う武器の最も大きなものが落胆であることを前回話しました。また「恐れ」も武器の一つであることを話しました。人がどのように思うかshれないとして、主が命じられていることを控えることがあります。

そして、もう一つの武器があります。それは、「自分の家を建てること」です。主が自分の内で始めてくださったこと、また自分たちの間、つまり教会において始めてくださっていることを、自分自身の事柄、自分の仕事であったり、自分の趣味であったり、自分の家族のことであったり、自分自身が行っていることに忙しくなって、それで主のお仕事に携わる時間を無くすることです。

イエス様のところに来るのに、このような忙しさは致命的な結果をもたらします。神の国には食事が用意されています。けれども、その食卓に来ない人々がいます。「するとイエスはこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。宴会の時刻になったのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。』と言わせた。ところが、みな同じように断わり始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』もうひとはこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』(ルカ 14:16-20)」自分のしていることがあります。畑を買った、牛を買った、そして結婚したということです。自分のしていることで、神の国への招きに応答しなくなるというのは霊的な致命傷を残します。

ハガイ書 1 章 2 節で、神は「この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。」という、ユダヤ人がしていた言い訳を引用されています。「時がまだ来ない」というのは、もっともなように聞こえます。霊的にさえ聞こえます。しかし、神の時が来ていないのではなく、自分自身が神の命令に従わないだけ、不従順であるだけなのです。

主の働きをすることは、困難が伴います。主に従おうとすれば、その時から反対が始まります。それは初めに、自分自身の肉という反対者がいます。ある人に伝道しようと思ったら、急にその人が忙しくなって、会うことのできる時間がなくなった。じれっとなりますね。また、自分が何か変なことを言ったのか？と自分を責めたりします。そこで試されているのは、忍耐です。私たちが主のところに行く時まで、忍耐して待っていてくださったのと同じように、私たちがキリストにあって人を愛する時に、その人が主のところに行く時まで忍耐する必要があります。

そして、周囲の人々の反対があります。周囲の人々は、自分が主の働きを始めると急に批評家になります。一見、前進が見られない奉仕の働きがあります。そうすると、「あなたは、このようなことをしているから、今のようによくいっていないのだよ。」と話し始めます。そのような批評家、評

論家は、自分はその労苦に指一本触れていません。自分の手を汚さずに原因探しをし、神が始められて、神が行われていることなのに、そこに非を見出そうとするのです。

そして外部の人々の反対がもちろんあります。教会の礼拝に集う、また教会の奉仕をしていれば、自ずと未信者の家族が嫌がります。そして、仏式の葬儀など、クリスチャンとしてはすることのできない行為がありますが、そのことに対してなじり、酷く責め立てます。

ですから、このような自分の肉、周囲の批評、また外部の反対がありますと、「一層のこと、やらないほうがまだ。」と思うのです。それで、あきらめます。そして自分に言い聞かせるのです、「これは主の御心である」と。主の働きは、まるで順風が吹いていなければそれは、すべて頑張っていることであり、肉の行いだ。御霊によれば、自分が努力しなくても、ひとりでに戸が開かれるのだ、と言い聞かせます。そして、自分自身のことをやり始めるのです。

けれども、神は私たちを愛してくださっています。私たちが、神の事柄から離れてしまわないように、そのやっていることを空回りさせます。やっていることがうまくいかないようにさせます。「多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいで、穴のあいた袋に入れるだけだ。」とありますね。一生懸命働くのですが、成果が出ないのです。以前、ある二組の夫婦について、教会の牧師さんが話していました。一組はたまに教会に来ます。いつも、「お金がない」といってその不安を漏らしています。けれども、もう一組の夫婦は、その夫婦よりも収入が少ないはずなのに、幸せに暮らしています。きちんと教会に通い、献金も捧げています。優先順位が違うのです。神の国を第一に求めれば、これらのものは加えて与えられるという原則の中に生きているか、そうでないかの違いなのです。

けれども主は、そうした空回りを敢えて与えてくださいます。仕事に失敗させてくださいます。人間関係でうまくいかないようにさせていただきます。勉強しても成績が上がらないようにさせていただきます。そうして、自分自身が本来行わなければいけない、神の御心のところに来るように注意喚起をしてくださっているのです。主の命じられているところに立ち返り、その仕事を行うのです。主の宮を建てるのです。

## 2B 「わたしの霊によって」

これが主にハガイの預言でした。そしてゼカリヤは、もっと長い預言を行います、14章分あります。ハガイの預言が叱責と励ましであるのに対して、ゼカリヤの預言は慰めです。主の仕事を取りかかり始めた者たちを主は忘れておられない、主は覚えておられるという慰めです。ゼカリヤ書 4章 2節から 10節までを読んでみましょう。

2 彼は私に言った。「あなたは何をみているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七

つのもしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。3 また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」4 さらに私は、私と話していた御使いにこう言った。「主よ。これらは何ですか。」5 私と話していた御使いが答えて言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」6 すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。7 大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は、『恵みあれ。これに恵みあれ。』と叫びながら、かしら石を運び出そう。」8 ついで私に次のような主のことばがあった。9 「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手が、それを完成する。このとき、あなたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。10 だれが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を歩き巡る主の目である。」

ゼカリヤが見た幻は、燭台です。祭司であるゼカリヤには、見なれたものでした。聖所に入ると、その左側に、七つの枝がついた純金で彫られた燭台があります。祭司は、その灯が消えることがないように、油をそのともしび皿に注いで奉仕をします。けれども、その働きをする必要がありませんでした。なぜなら、オリーブの木から直接、管によって油がともしび皿に注がれていたからです。

ゼカリヤがそれは何かを天使に尋ねました。御使いは、6 節です、「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」と答えました。総督ゼルバベルは、ユダヤ人にとっての政治的指導者です。ヨシヤは大祭司で霊的、宗教的指導者であります。ゼルバベルは政治を司っていました。周囲の住民の激しい反対が、またいつ起こるか分かりません。神殿の材料が枯渇しています。何よりも、神殿建築そのものが自分たちにとって、あまりにも膨大な仕事なので、それを考えるだけでも圧倒されて、押しつぶされてしまいそうです。

そこで主が語られました。まず「権力」によるのではない、と。この権力とは武力のような物理的な力のことを示しています。周囲の敵から仲間を守るために武器も必要ですが、この少数集団には力が全くありません。そして、「能力による」のでもないと言われました。この能力とは、いわゆる人材や資材のことです。神殿建設に取りかかる人々が足りない、その資材が足りない、という不安をゼルバベルはいつも抱えていました。けれども、主は言われました。「これらのものにはよらず、わたしの霊による。」と言われるのです。

先ほどの燭台の幻において、その油注ぎは神の霊のことを表していました。祭司が日々の務めで油を注ぐというような自分たちがしなければいけないことではなく、神が無尽蔵にご自分の霊によって光を灯してくださるのです。神の御霊によれば、自分たちには到底できなかったこと、何年かけてもできなかったこと、何人いてもできなかったことも、一瞬にして可能にしてくださいます。



7 節を見てください、「大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。」とあります。自分が取りかかっている事業は、大いなる山に見えます。けれども、神の御霊によってそれが平地のようになります。御霊が働かれるところには自由があるのです。それは個人が経験するでしょう。これまで止められないと思っていたことが、御霊に触れられて一瞬にしてやめてしまったという経験がある人がいるかもしれません。また、これまで何年伝道しても信じなかった人が、一気に回心したということもあります。日本においての伝道はどうすればよいのか、これだけクリスチャンが少ない所でどうしているのですか？と私はしばしば外国の人々から尋ねられます。その答えは簡単です、「同じ神の御霊が働いておられます。そこには、何ら困難なことはありません。」

そしてゼルバベルは、「『恵みあれ。これに恵みあれ。』と叫びながら、かしら石を運び出そう。」と叫んでいます。かしら石とは、建築物に要となる石のことですが、彼は「恵みあれ、恵みあれ！」と叫んでいるのです。彼にとって、この建設が自分のしたことではなく、もっぱら神の恵みである、神が働いてくださったことであると、感動して叫んでいるのです。

御霊の力を受けるには、どうすればよいですか？という質問をしばしば受けます。私は、この頃こう答えるようにしています。「失敗してください。(笑)」言い換えれば、自分に死んでください、ということです。御霊の力によって大いなる働きをした人は、必ず全員、自分に死んでいる人です。モーセは、自分が生きている時は一人としてエジプト人からイスラエル人を救うことはできませんでした。彼が四十年間、荒野で羊飼いをし、全くの挫折、自尊心が砕かれた時に主は彼を呼ばれました。結果、彼は、自分は杖を上げて、手を上げたという行為をただで、つまり主の命令に聞き従っただけで、エジプト軍の精鋭部隊を海に沈ませることができたのです。

使徒ペテロは、イエス様を三度知らないと言い、とんでもない失敗をしました。そこで、イエス様は三度、「わたしを愛しますか？」と彼に尋ねられ、「わたしの羊を飼いなさい。」と命じられたのです。彼は自分の力が粉々に砕かれたので、それで聖霊に満たされてイエス様の御名を大胆に語りました。

神は、私たちに恵みを注がれるために、これは私ではないということを徹底的に教え、押さえつけ、砕かれます。そして、自分ではないことをはっきり分かせたうえで、神は上からの恵みを惜しみなく施されるのです。御霊に満たされるとは、神の恵みに浴することです。自分が何をするのか？ということを考えているかぎり、聖霊に満たされることは決してないでしょう。自分がしているうちは、神が働くことができないのです。

そして、「彼の手が、それを完成する。」とあります。彼の手には、下げ振りがあります。下げ振りとは何か分かりますか？建物を造る時に、測定する時に垂らすものですね。つまり、ゼルバベルの手が、いかに小さなもの、些細なものに見えても、その手から神が大いなることをする、ということです。ここで大事なのは、「下げ振りを手放さない」ということです。今、自分が取りかかっている

主から与えられている仕事が、どんなに些細なことに見えても、それに忠実であるということです。どんなに小さく見えても、どんなに地味に見えても、どんなに成果を見ることなく、その無に等しいと見えるかもしれない働きから、主はご自分の恵みを惜しみなく注いでくださるのです。

私たちの教会は、今、四年目に入ろうとしています。新しく信仰を持たれていく人々によって始まりました。そして、新しく信じていく人々を一人一人、神が起こしてくださっています。そして、今まで他の教会で信仰を育まれた方々も主がここに導いてくださいました。そして、目で見える形でも、また見えない形でも、それぞれの中に教会内で、また教会外で大きな山が立ちはだかっていると感じる人もおられるかもしれません。しかし、神の御霊が、恵みの御霊がその山を一気に平地にしてくださいます。ですから、恐れずに主の仕事に取りかかってください。

そしてイエス様に信仰を持っているならご自身がキリストの体の一部なのです。「この教会は、これこれが、できていない。」と批評する時に、実は自分自身がそれを行っていないということに気づきましょう。なぜなら、その教会というのは自分もその一部だからです。私たちは自分の教会について批評家になることはできません。私たちにできることは、イエス様が言われた、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(黙示 2:7)」ということです。御霊がキリストの体に語っておられます。そしてその部分である自分に何を語っておられるのか、一心に耳を澄ますことであります。そして自分が教会の益のために、主から何を命じられているかを待つことです。その中で、自分自身を退け、キリストに心と思いの座席を譲るのです。

そして主に命じられることに従うならば、主が、みなさんお一人お一人に御目を注いでくださいます。主が始められた業を阻止できる者は一人もありません。反対者も逆に神の働きを後押しするような逆転劇が起こります。